

問いがつながる複式教育
～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

複式学級における「問い続け、学び続ける」とは、教師の働きかけだけではなく、子どもたち自身が主体的に学習活動の中から新たな課題を見出したり思考を再構築したりしながら、問いを深めていくことだと考えている。学びの中で生まれる課題は、一人で完結するものではなく、学び合いの中で多様に変化を遂げながら解決されるものである。そのような学び合いを実現させるためには「誰かの問いは自分たちの問いである」というような受容的な関係が必要ではないだろうか。そこで、複式部の研究テーマを「問いがつながる複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」とした。教師は、子どもたちの問いや考えをみとり、それらが効果的につながるような支援を行うことで、新たな学びが生まれると考えたからである。

本校複式部は、同時間接指導を軸にして研究を進めている。子どもたち自身が、複式学級の特性を活かし、司会進行を務め記録し話し合う中で学習内容を確実に身に付けた上で学びを深め高めていくことをねらいとしている。また、複式部では、少人数指導・異学年交流などその特性を活かした学習課程を組み入れ、複式学級における効果的な指導の在り方を追究することとした。少人数による学習では、一人一人に発言の機会をもたせることや具体物の操作や体験などの場を保障することが多くの場面で可能となる。また、異学年交流の特性を活かし学年相互間での学び合いが可能となる。学習経験の異なる子どもたちが互いに関わり合う機会を意図的に取り入れることにより、新たな気づきが生まれ、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。これらの複式教育の有効性を活かした指導法を軸として研究を深めた。

(2) サブテーマ「子どもの言葉でつくる授業」とかがわって

複式教育における有効性を実現させ、子どもたちが主体的な学び手となるためにはその基盤となる力を子どもたちに身につけさせていかなければならない。その一つが表現力やコミュニケーション能力の育成である。複式学級の特性である少人数指導の授業では、30人規模の学級と比較して多様な意見の交流や子どもたち自身の学び合いの範囲も狭くなる。また、6年間を同じ教室で過ごす子どもたちの人間関係も固定化されがちである。それらの課題を克服し、より質の高い学びを深めていくためには子どもたちが豊かに自分自身を表現し、友達と関わろうとする力を培っていかなければならないと考えている。

子どもたち一人一人が課題に対して様々な考えを出して話し合い、認め合うことでお互いの言葉をつなぎ、考えを深め合い、追究していくことこそが複式学級における「子どもの言葉でつくる授業」である。

また、複式学級の学びにおいては、間接指導^{*1}時に司会と記録を子どもたちが行い、自分たちで自主的に進めていくことが重要となる。そのためには、まず、学びの基本的な流れを共有するとともに、授業を進める技能を子どもたちに身に付けることが必要である。

複式部では、学びの基本的な流れと授業を進める技能を以下のように考え研究を進めた。

〈参考資料〉

学びの基本的な流れ	授業を進める技能
①課題を確かめる ・疑問を明確にして課題とする ・学習目標を設定する	司会者 ・学習活動の時間を適切に設定する ・発言、ミニボードの利用、ノートや具体物の提示など、発表の方法を指示する
②見通す ・どのような学習活動が適切か ・授業の終盤ではどうなっていたいのか	・発言を受けて様々に聞き返す ・学習の流れを決める
③調べる、考える（ひとり学び） ・課題に対する自分の考えをまとめる ・考えを伝え合うための準備をする	記録者 ・学習活動や発言を短くまとめて記録する ・囲む、線で結ぶ、文字の色を変える
④深める（ペア学習やグループ学習）	フォロワー ^{*2}

間接指導^{*1}…教師が一方の学年で指導しているとき、他方の学年の子どもたちに、自分たちだけで学習を進めさせること。

フォロワー^{*2}…司会者、記録者以外の授業に参加する子どもたち全員を指す。

<ul style="list-style-type: none"> ・考えを表出して伝え合う ・全体で吟味してより良い考えに高める ・課題を深める <p>⑤まとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習目標を達成できたか ・どんなことがわかったか 	<ul style="list-style-type: none"> ・司会が滞った場合にアドバイスする ・記録の補助を行う ・相手に伝わりやすい発表方法を選択し、短くまとめて話す ・発言内容について考えながら最後まで聞く ・立場や考えを表情や顔色に表す
---	--

(2) 複式学級でめざす子ども像

複式学級で学び合うためには、友だちの考えを大切にし、自分の考えも大切にされるという学級風土を形成し、一人一人が安心して取り組めることが重要である。

①友だちの話聞くことができる子ども

子どもたちで学び合うためには、「聞く」ということが大きな位置を占める。ただ表面的に聞くのではなく、受容的に聞くことが大切だと考えている。受容的に聞くとは、最後までじっくりと聞く・発言を繰り返せるように聞く・言いたいことを考えながら聞くなどである。友だちの意見を聞き比べ、話し合いの方向性を見出していく。

②友だちの考えに共感し、話し合いを楽しめる子ども

自分の考えを素直に出せることや、肯定的に受け入れてもらえることの安心感が、話し合いを楽しむという学級風土につながる。相手の考えに興味をもち、相手の考えを楽しみにできる子どもを育てたい。また、話し合いの重要性や価値を感じさせるような課題を設定し「この友だちとだから解決することができた」というような経験をさせたい。

③主体的に学び合う子ども

複式学級で主体的に学び合うには、「新たな問いを見つけることができるか」「自分たちの学びが学習目標から外れていないか」ということを常に認知することが求められる。また「自分たちの学びが目標に向かって高まっているか」を認知できる力も育てたい。明確な課題設定を行うことや本時や単元の終末に学習をふり返る機会を設ける。

2. 複式学級における「問い続け、学び続ける子どもたち」

(1) 複式学級におけるみとりと支援

複式学級の授業は、少人数のため考えをまとめやすい環境にあるが、一人一人の考えに深く触れて違いを見出したり、深めたりしようとしなければ、それ以上の学びにつながりにくい。正解のみを求めたり、事実としてとらえたりするだけではなく、表現されていないものや考えの奥に隠れているものを探れるようになってほしい。そのため教師は、子どもたちの理解・認識・立場・考えの過程・関係性を丁寧にみとることが必要である。また、別の視点で対象に出合わせたり、説明を求めるたり、理由や考えの過程を表出させることにより、子どもの考えをつなぎ支援する必要がある。しかし、間接指導時には子どもたちの考えをみとりにくい。そこで、子どもたちの考えを板書記録・ワークシート・ノートなどに残させることによってみとり、支援することが重要である。

(2) 複式学級における「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿

- | |
|---|
| <p>①学びを迫及する子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物事に働きかけ疑問をもつ ・解決への見通しをもち、様々な方法を考える ・身につけたことをもとに、考えを深めたり広げたりする <p>②他者との関わりを大切にしている子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友だちの考えを受容的に捉える ・友だちの考えを聞き、自分の考えを深めたり広げたりする ・友だちとの話し合いの中から、新たな課題を見つける <p>③学びを実感する子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学んだことを活かし、新たな課題に取り組む ・友だちとの関わりから生まれた問いを課題とし、自分たちで解決をめざす ・自分の考えを再構成する |
|---|

(3) 実践例

小学校学習指導要領解説算数編において5学年では、乗数・除数が小数の場合にも乗法や除法が用いられるという意味の拡張が主たるねらいであるのに対し、6学年では、乗数・除数が分数の場合の乗法や除法の計算の仕方を考え、それらの計算ができるようにすることが主たるねらいとして記されている。

「意味の拡張」と「計算の仕方」という違い「小数」と「分数」といった違いはある。しかし、整数の場合をもとにして小数や分数の場合も乗法や除法が成り立つことを類推的に思考することや、いくつかの値を求めること、1あたりの値を求めることなどに違いはない。扱われる数の違いを越え、子どもたちが課題の中から共通性を見出し学びを深める機会となることを期待し、単元を構成した。

<授業の実際>

本時は、5年生は1mあたりの値段、6年生は1kgあたりのチーズの量といずれも等分除の思考を用いて1あたり量を求める課題である。1より大きい整数の比較量を提示すれば、子ども達は既習を活用し、比較的容易に場面を捉え解を求めることができる。しかし、比較量が小数や分数になったとき、等分除の思考を用い、整数と同じように課題を捉え演算決定することは難しいと考えた。

そこで、比較量をあえて様々な演算を活用して解ける $1/2$ という値にすることにした。

5年生課題

課題①

0.5mのリボンが96円で売っています。
このリボン1mの値段はいくらでしょう。

S1 96×2

0.5mと合わせたら、1mやろ。

0.5だけやったら1倍、合わせたら2倍

6年生課題

課題①

$1/2$ 枚のピザを作るのに、チーズが
 $5/6$ kgいりました。このピザを一枚
作るのにチーズは何kgいるでしょう。

S1 $5/6 \times 2$

1枚だったら $1/2$ 枚が2つで1枚になるから、

S2 $5/6 + 5/6$

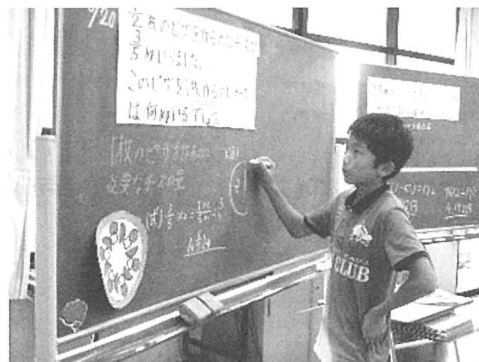
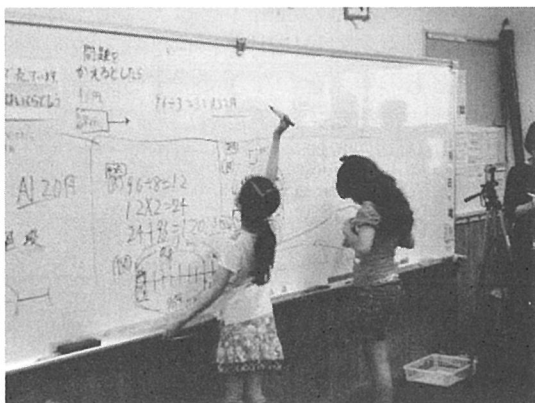
$1/2$ が2つで1枚になるから、 $3/5$ がもう一つ
で1になる。

T 1あたりの値段(量)は、何算で求めること
ができますか。

S かけ算

足し算・・・

S3 わり算でもできかも、でも・・・。



子どもたちにとって $1/2$ という値は特別であり「半分」や「2つで1」という言葉に置きかえられる。

結果、両学年ともに乗法が用いられたのである。S3の「わり算でもできるかも・・・。」

というつぶやきに期待をしたが、それは先行学習による立式であり、その演算決定の理由を話すまでには至らなかった。

そこで、次に比較量を小数と分数に置きかえて課題を提示した。

課題②

0.8mのリボンが96円で売っています。

このリボン1mの値段はいくらでしょう。

S1 96円を8等分にする。0.1mが12円なんよ。
分かる？

S2 0.1m?

S1 0.8を8つに分けたら0.1m。

だから96円を8等分にすると0.1m12円なんよ。
12円×2して24円。0.2+0.8は1になるやん。
96円+24円で120円

課題②

5/6枚のピザを作るのに、チーズが

3/5kgいりました。このピザを1枚
作るのにチーズは何kgいるでしょう。

S2 さっきは、ちょうど半分やったから・・・
整数とかだったから割ってちょうど1とか
になったけど

今度は、5/6やから・・・。

何かかけたり、足したり、割ったりしたらえ
えんか分からん。

T 難しい数字？。

S1 5/6

T じゃあ、この数字変えよか。

S3 何でもいいん。

S 分数とか・・・

できるだけ小さい方が・・・

S 5 2 1

S6 1 やったらそのままやん。

もう答え出てるし・・・。

S1 $3/5 \div 2 = 3/10$

$3/5 \div 1 = 3/5$

$3/5 \div 5 = 3/25$

S2 ちょっといい。全部わり算になってる

$3/5 \div \square$,

それに当てはめて考えたら・・・。

先にも述べたように、本時は「意味の拡張」と「計算の仕方」という違い「小数」と「分数」という違いがある。しかし、整数の場合をもとにして小数や分数の場合も乗法や除法が成り立つことを類推的に思考することや、いくつ分の値を求めること、1あたりの値を求めることなどに違いはない。

授業の終末に、子どもたちがお互いの課題や学びの足跡を見て扱われる数の違いを越え、子どもたちが課題の中から共通性を見出し学びを深める機会となることを願っていたがその成果は十分に達成されたものではなかった。

しかし、複式教育の特性、2学年の子どもたちが同じ教室で学ぶという価値の1つはここにある。異学年がどのようにつながり合い、学び合うことでその価値を見出していくことができるのか今後も研究を進めていきたい。

3. 研究の展望

学び合いの場を生み出すみとりと支援を充実させるため、以下の点を重要視して研究を進める。

① 少人数学級の特性を活かした授業づくり

単式学級における少人数指導の利点が、複式学級においてすべては当てはまらないというのが現実である。少人数であるから、教師が一人一人に多くかかわる時間がもてるというのは、まさにその一例である。しかし、言葉を返せばそれは子どもたちが相互に学び合う活動を充実させることができるということである。このように、本校複式部では、子どもたちが主体的に関わり合い学び合う姿を実現させるために研究を進めている。少人数学級では、様々な活動において一人一人がより強く相手意識をもち自分の考えを表現する機会を多くもつことができる。人との関わり方や話し方、書き方などの表現力の育成を図ることが重要である。また、少人数の特性を活かし、一人一人がものに触れ体験的な学習活動の充実を図りたいと考えている。

② 複式学級の特性(異学年交流)を生かした授業づくり

複式学級では、異学年の子どもたちが同じ教室で学ぶという特性がある。少人数学級における学習活動では、意見の多様性や固定化された人間関係の中で学習に対する新たな刺激や学習欲に欠ける場面もある。異学年の子どもたちが関わる学習活動を取り入れることにより、多様なものの見方や学習に対する刺激を生み出すことも有効な手段である。また、異学年の子どもたちが交流することにより思考の高まりや深まりも期待できる。

さらに、同領域の学習内容を単元構成することで、互いに学び合うことが可能でなると考える。上学年は既習事項の想起することで学習を振り返り、下学年は、学習に見通しをもつことも期待できる。つまり、系統的・統合的な学習効果を生み出すことができるということである。

異学年の子どもたちが、年少から年長へと育っていく中で主体的に学習活動に参加し、主体的に役割を担い、学び合うことの大切さに気付く学習活動を単年ではなく6年間という継続した学びを繰り返すことにより効果的に学習集団として機能させていきたいと考えている。

③ 単元構成や課題を工夫する

子どもたちの多様な疑問や考えが引き出せるような単元構成や課題を工夫しなければならない。そのためには、子どもたちが興味や関心をもちやすい対象を準備する必要がある。子どもたちにつけた力を明確にした上で、身近にある対象と深く関われるようにすることで、課題意識を深められると考えている。特に複式学級では、間接指導の時間があるため、単元導入における子どもたちの課題意識に対する確かなみとりと支援が必要になる。

課題意識をみとるには、子どもたちの学習経験をみとることが大切である。単元を構成する上で、既習内容が指針になることが多いからである。しかし、既習内容をなぞるような学習では、新たな問いや学びは生まれにくい。そこで、教師は子どもたちに寄り添いながらも新たな問いや学びに導くことが重要である。そのためにも、教師の確かなみとりと教材研究を深めることが重要となる。

④ 主体的に学び合う子どもを育てる

子どもたちが主体的に学び合うためには、全員が課題解決のための見通しをもつことが必要だと考えている。そのため、単元導入時に子どもたちに課題を挙げさせたり、単元を通しての目標を立てさせたりするなど、単元全体の見通しをもてるようにしたい。1時間の授業では、学習計画を作成させるなどして課題解決のための過程に見通しをもたせたい。

また、振り返りを大切にし、自分たちが選択した課題解決の方法は適切だったか自己評価し、改善できるように支援したい。そのため、異学年の子どもたちが互いの授業を参観し合うことで、客観的で子ども目線の評価と授業改善ができると考えている。さらに、授業の振り返りだけではなく、単元を通した振り返りも充実させたい。そうすることで、単元同士がつながり、その単元に応じた学習計画を立てることができると考えている。

⑤ 授業における教師の出番を明確にする

間接指導時は、子どもたちが主体的に学び合い、学びをデザインできる時間である。しかし、子どもたちだけで学びの質を高めることは難しい。そこで、学習内容の価値を教師が十分理解し、子どもたちの実態をみとった上で、適切な発問や指示を出す必要がある。待つべきところは待つ、教えるべきところは教えるというように、1時間の授業における教師の出番を明確にして指導を行うことが

大切だと考えている。

⑥ 学び方を学ばせる

子どもたちが主体となる複式授業では、子どもたち自身が司会や記録を行う。司会者には、授業を進める技能だけでなく、発言をまとめたり、考えを引き出したりする技能が必要とされる。記録者には、フォロワーの発言を要約してわかりやすく板書する技能が必要とされる。考えを記録することで、互いの考えに触れやすくなるだけでなく、学びの足跡を残すことにもなる。フォロワーは、自分の考えを表出して伝える技術や話し合いを深めるための技術を身に付ける必要がある。さらに、司会者や記録者を助けながら授業を進めることも大切にさせたい。

子どもたちに学び方を学ばせるため、発達段階を考慮した目標を設定し、次のような表を作成して指導に活かそうと考えている。

	低学年	中学年	高学年
学び方	<u>教師の支援を受けながら</u> 学び方を知り、様々な学習形態を経験する。	<u>教師の支援を参考にして</u> 課題解決に合った学び方を選択し、自分たちで学習を進める。	<u>自分たちで</u> 課題解決に最適な学び方を選択し、学習を効率良く進めて学びを高める。
司会者	<ul style="list-style-type: none"> ・司会の役割を自覚し、基本的な学習の流れに沿って進行する。 ・順に意見を聞くなど、偏りなく指名する。 ・指示を出したり、発言を求めたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題に合った学習活動を選び、活動時間を設定して進行する。 ・同じ考えや違う考えを分類しながら指名する。 ・全体の様子を見て指示を出したり、発言を次につないだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習課題によって臨機応変に対応し、適切な方法を選んで効率よく進行する。 ・相手の意見を受けて、関連付けながら指名する。 ・場の状況に合わせて個別の指示を出したり、発言をまとめたりする。
記録者	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な大きさの文字で単元名や発言内容を板書する。 ・大事なところを線で囲んで目立たせるなど、工夫して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題や学習活動など、大まかな学習の流れを板書する。 ・誰が発言したか分かるようにしたり、立場と理由を色で分けたりするなど、工夫して書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動や発言内容を分類して整然とまとめ、学習の流れを明確にして板書する。 ・反対意見や追加意見を効果的に書き加え、発言内容を線で囲んだり、矢印で関連性を示したりするなど、工夫して書く。
フォロワー	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の方を見て、聞きやすい声の大きさと自分の考えを話す。 ・話し手を見て、発言の最後まで聞く。 ・相手の意見との違いに触れながら適切な考えを見出そうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手との関連を挙げながら自分の立場を明確にし、理由をつけて話す。 ・話し手の考えを理解しようと努力し、表情に表したり頷いたりしながら聞く。 ・相手とともに新たな考えを生み出したり、深めたりしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の考えに触れたり、視点や論点を明確にしたりして、整理しながら話す。 ・話し手の意図を捉え、自分の考えと関連付け、考えを深めながら聞く。 ・相手と考えを伝え合い、より適切で価値の高い考えを生み出そうとするとともに、自分の考えの変容に気付く。

4. 研究の評価

授業の様子を記録したビデオ・音声・写真・ノート・ワークシートなどを用い、できるだけ詳細な授業記録を作成する。学び合いの場を生み出すみとりと支援がどのように成立していたかについて、その授業記録を「Aのようにみとり、Bのような支援を行うと、Cのように子どもたちの学びが高まった。」「Dと発問することで、子どもたちが主体的に学び合う姿が見られた。」のように分析して評価を行う。